

『夏の花』はどのように読まれてきたか？

中野和典

一 はじめに

「夏の花」は一九四七年六月に「三田文学」に発表されたが、本多秋五によれば当時は「原子爆弾」といふ題名で「近代文學」の第二号（一九四六年二月）に掲載することが計画されていた⁽¹⁾。しかし、埴谷雄高によれば当時は「占領政策による検閲が開始されたばかり」であり（これについては原民喜が永井善次郎（筆名・佐々木基一）に宛てた書簡にも「なるほど検閲といふこともあつたのですね」と記されている⁽²⁾）、また「占領軍が原子爆弾の惨害

について極度に神経質な気のつかひ方をしてゐる」という状況にあつたため、「事前検閲を受けなければならなくなつた」（近代文学）の編集者たちは「原子爆弾」

を内闇に（佐々木基一の証言によれば〈G H Qの検閲のほうにいる二世〉に⁽³⁾）出した結果（検閲に通りがたい）という返答であったため、「近代文学」には掲載されなかつた。その後、題名が「夏の花」に改められて「事前検閲のない」「三田文学」に掲載されたのだ⁽⁴⁾。

本多秋五の「僕たちは一読して傑作と認め、雑誌にのせられないのをいつまでも残念がつた」という証言に現れている通り⁽⁵⁾、「夏の花」（原題「原子爆弾」）は「三田文学」に掲載される前から原稿を読んだ人々の間で高い評価を得ており、一九四八年一二月には「第一回水上瀧太郎賞」を受賞している。その際、原民喜はこれ



初出冒頭部

夏の花
原民喜



水上瀧太郎賞受賞

まで「私の書くものは殆ど誰からも顧られ」ず「知己を百年後に俟つつもりで、その覚悟はしてゐた」ため、「生きるうちに、こんなことになるとは考へてもみなかつた

こと〉であり、〈蔭で絶えず私を支へてゐてくれた人たちのことをおもふと、私の眼は熱くなる〉と驚きと喜びを語つている⁽⁶⁾。佐藤春夫は〈神経質な文学の内面性の外にこの知的に外面的な即物性を具へてゐるところが原君の文学の尊重すべく新らしい個性〉であり、〈「夏の花」は原君にうつてつけの素材でそのために特に効果を納めたと云ふべきであらう〉とし、〈あの驚天動地（それこそ文字通り）の事実を冴え切つた文字に写してあの落ちついてゆきとどいた文章を成したのは壯觀とも称すべく、十分に賞せらるべきであらう〉と賛辞を贈つてゐる⁽⁷⁾。

「第一回水上瀧太郎賞」を受賞した翌々月（一九四九年二月）に能楽書林から『小説集 夏の花』が刊行され、「夏の花」は表題作としてその最初に収められたが、この時点でも本文の一部は削除されたままであつた。原稿をもとに削除部分が復元された夏の花の完全版が発表されるのは、一九五一年三月一三日に原民喜が吉祥寺西荻窪間の線路上で自ら命を絶つてから約二年後、一九五三年三月に角川書店から『原民喜作品集 第一巻』が刊行されたときであつた⁽⁸⁾。このように複雑な成立事情は「夏の花」の読まれ方にもさまざまな影響を与えることになる。



初版書影
第一部作であると自作解説をしている⁽⁹⁾。このため次の図に示す通り、「夏の花」については短篇「夏の花」、

「夏の花」三部作、「夏の花」短篇「夏の花」、「夏の花」（三田文学）一九四七・六）に読まれてきたかについて検証したい。

「夏の花」（三田文学）一九四七・六）

詩 「燃工ガラ」（『小説集 夏の花』能楽書林、一九四九・二）
「廃墟から」（『三田文学』一九四七・一）
「小さな村」（『文壇』一九四七・八）
「壊滅の序曲」（『近代文学』一九四九・二）

詩 「昔の店」（『若草』一九四八・六）
「水花」（『文学会議』一九四七・一二）

エッセイ 「戦争について」（『三田文学』一九四八・九）
エッセイ 「平和への意志」（初出誌未詳）
「後記」（『小説集 夏の花』能楽書林、一九四九・二）

二 短篇「夏の花」はどのように読まれてきたか？

題名 GHQによる検閲があつたために、「夏の花」は発表す

る媒体や時期を変えたり、本文の一部を削除したりするという変化を受けることになったが、「夏の花」という題名も変更を強いられた結果のものである。原民喜が永井善次郎（筆名・佐々木基一）に送った手紙には「原子爆弾」といふ題名がいけないなら「ある記録」ぐらゐの題にしてはどうでせうか、それともまだ適切な題があればそちらでつけて下さい」と記されており⁽¹⁰⁾、この作品の題名は「原子爆弾」→「ある記録」→「夏の花」という形で変わつていつたことが分かる。このような題名の変化について、仲程昌徳は「誰が『原子爆弾』を『夏の花』にかえたかは不明である」としながらも「原が、その後、作品の題名に関して注をしてないことからすると、原自身が『三田文学』への掲載が決まりた時、考えた題であつたか」と推測している⁽¹¹⁾。竹原陽子は一九四六年七月二九日に丸岡明が原民喜に送った葉書に「夏の花」拝見しましたが、やはり少々危険のやうです」と記されていることから「三田文学」に持ち込んだ時点で、原稿「原子爆弾」の題名は「夏の花」に変更されていたことを示した上で、「この改題はG H Qの検閲を考慮して行われたに違ひないが、おそらく民喜自身によるもの」であり、「小説集夏の花」を出版した際、表題として用いていることからも、本人も納得していたのではないかろうか」と推測している⁽¹²⁾。

「夏の花」という題名の由来は小説冒頭に「私」が〈妻の墓〉に参るために買った花について（その花は何といふ名称なのか知らないが、黄色の小弁の可憐な野趣を帶び、いかにも夏の花らしい）と語っていることによると推測される。この花について山本健吉は「私」の亡き妻だけでなく〈すべての原爆犠牲者の靈

へ捧げる彼の献花もあります」として〈黄色い夏の花〉を広く〈原爆犠牲者〉に手向けられたものと解釈している⁽¹³⁾。さらに「夏の花」という題名は指示対象を広げて捉えられるようになり、萬屋秀雄が〈作品全体を象徴させる題名としての「夏の花」〉は、原子爆弾そのものを表わすキノコ雲のような花（悲劇性）と同時に被爆死者すべてにささげる手向けの花（祈り）としてもうけとれよう」と論じている通り⁽¹⁴⁾、（一）亡き妻（さらには同じ〈墓〉）に入っている「私」の（父母）への手向けの花、（二）被爆死者への手向けの花、（三）原爆（原子雲）という大きく三通りの解釈がされるようになる。

記録／虚構

すでに述べた通り、題名が「原子爆弾」から「夏の花」へ変えられる前に、原民喜は「ある記録」という題名を提案していた。また原が「夏の花」「廃墟から」など一連の作品で私はあの稀有の体験を記録した⁽¹⁵⁾、あるいは〈僕は自分が体験した八月六日の生々しい惨劇を、それがまだ歪まないうちに、出来るだけ平静に描いたつもりである〉といった自作解説をしていることから⁽¹⁶⁾、「夏の花」は原の被爆体験を記録することを目指して書かれたものであることが分かる。この自作解説に沿うように佐々木基一は「夏の花」を〈ジョン・ハーシー〉がのちに広島を訪れ、世界中に事の真相が知れわたるやうになるはるか以前に、日本の作家が、飢ゑと死の危険に脅かされながら、広島の忠実な記録を書き綴つたといふ事実は記憶されていいだらうと述べている⁽¹⁷⁾。この他にも「夏の花」を記録とする文献は多く見られる。ただし、本多秋五が「夏の花」では、冷静な記録がそのまま詩となる異常経験が扱はれた」と論じ⁽¹⁸⁾、山本健吉が〈單なる記

録に終らず、詩があり、祈りと訴えとの切実な声を響かせている」と論じた通り⁽¹⁹⁾、「夏の花」を単なる記録とは見ない解釈も早くからあつた。このような解釈は本多と山本の論の中に「詩」という言葉が見られる通り、「夏の花」の遊び近くに「ギラギラノ破片ヤ……」という詩が挿入されていることから成り立っていると考えられる。この「ギラギラノ破片ヤ……」の部分は、後に独立した一篇の詩として「原爆小景」(『原民喜詩集』細川書店、一九五一・七)にも収められており、一般的な記録文とは異なる「夏の花」の印象を生み出しているのである。

また『原民喜全集 第一巻』(芳賀書店、一九六五・九)に「夏の花」のもとになつた「原爆被災時のノート」がはじめて掲載され、このノートの存在がいわば「記録(夏の花)のもとになつた記録(ノート)」として広く知られるようになつたことも「夏の花」の読まれ方に影響を与えていた。開高健は「原爆被災時のノート」を「夏の花」の〈根拠となつたらしいもの〉と位置づけて「ノート」がウソであるか、真実であるか、「夏の花」がウソであるか、真実であるか、あるいは両方とも真実なのであるか」という問い合わせをして、〈文字に書かれたものはいつきいフィクションなのだとという覺悟をよくよく心底に徹しておきながら〉との問い合わせに向きあうときの基本的な姿勢を示しながら、「ノート」の記述がその文章のズムにおいて私にとって真実と感じられ、「夏の花」の記述がそのリズムにおいて私にとって真実と感じられるのなら、兩者はそれぞの種において傑出したもの」なのだとして事実としての真偽ではなく、それを真実だと感じられるかどうかという視点から両者を高く評価している⁽²⁰⁾。その後、「夏の花」と「原爆被災時のノ

ト」との詳細な比較が行われるようになり、脇康治が「小説「夏の花」の構成は、記録「原爆被災時のノート」の、時間的・空間的順序に従つて事實を書き綴つた構成そのままでなく、さまざまの文学的効果をねらつて、再構成されている」と論じた通り⁽²¹⁾、書かれたものごとの加除や順序の違いなどを根拠として、「夏の花」を「原爆被災時のノート」という記録を再構成した小説とする見方が広がる。たとえば江種満子は「原爆被災時のノート」に記されていた「握飯」「オートミール」「アブラ菓子」「桃」といった(食べ物の関係の事項)や「ラン尿 蝅不潔力ギリナシ」といった(排泄物のこと)が「夏の花」では「すべて避けられ」、代わりに「未期の水」を求める人々の姿だけを描くことによって「食欲ある生者ではなく、救いのない、暗い、異常の死を死んでゆかねばならないかたたちへの鎮魂を願つた」のだと論じている⁽²²⁾。

記録か、虚構かという議論は「原爆文学」につきものであるが、「夏の花」の場合は詩の挿入と「原爆被災時のノート」という記録のもとになつた記録の存在によって、それがより積極的に問われてきたと言える。鷺只雄は「人類史上最初の核爆撃の被災者として原は明確に「このことを書きのこさねばならない」と自覚して書いた以上、それは当然記録として後世の批判に堪えるものでなければならない」とし、しかし「被災の正確な記録」と「詳細な報告」を求めるだけなら「役所のレポートの方がより適切」である「原でなくともよい」のであり、「小説家としての原が書くとすれば記録としての正確さは必須のものとして要請されるが、同時に作家が書く以上ある想念、仮に今それをイデーとよべば、イデーによつて記録が統一され、一個の完結した世界をつくりだしてい

なければならぬ」という判断のもとに「問題は記録か小説かと
いう単純な二者択一のそれではなく、「夏の花」は記録であると
同時に、原のイデーによつて統べられた原爆被災の状況を伝える
小説」なのだと論じている。⁽²³⁾

カタカナ詩

「夏の花」の結び近くで「私」が「この辺の印象
は、どうも片仮名で描きなぐる方が應はしいやうだ」と語つて「半
ラギラノ破片ヤ」で始まるカタカナ書きの詩を挿入していること
については、これまで多くの関心が寄せられてきた。竹西寛子は
『夏の花』の片仮名の一節にひき起された感動の記憶はいまも
初々しい」とその印象深さを語り、『この片仮名の部分』には「言
葉と世界と人間との関係についての、根源的な思考をうながすも
の」があると論じている。⁽²⁴⁾ 右遠俊郎は「片仮名の非日常性」と
「曲線を持たない片仮名の形像」が、それぞれ「世界の超現実性」
と「印象の模型性と機械性」という詩の直前の記述に「感覺的に
照応」しており、それによつて「印象のリアリティ」が「確保」
されていると論じている。⁽²⁵⁾ 江種満子は「カタカナ詩」の直前に
は「これまでの被災者や死者の個々の相を離れ、壊滅した広島の
全容を一覧した立場で、この出来事を歴史的に位置づけようとする
視点」つまり「激しい近代批判」の視点が記されており、詩で
用いられている「カタカナには文字としての鋭角性、用途として
の非日常性、心理としての秘匿性」があり、それらによつて「人
間性を奪つた近代物質主義への原の鋭い怒り、不信、絶望の声々」
が示されていると論じている。⁽²⁶⁾ 菅本康之はカタカナによつて「文
字の物質性」、さらには「唯物論的イメージの生々しさ」と「世
界の不気味で不透明な物質性」が示されていると論じている
⁽²⁷⁾。

田崎弘章はカタカナ書きの部分に坂口安吾が「文学のふるさと
（現代文学）一九四一・八）で語つているような「剥き出しにさ
れ、いかなる「物語」の力をもつても修復不能になつてしま
つた「不調和」を読み取つてゐる。⁽²⁸⁾ トリートは詩の前後の「明
示的」かつ「伝統」的な「散文から離れ」て「見慣れない書体」
や「分かりにくい言葉」で記すことによつて「今まであつた世界
（原爆の前）と、今ある世界（原爆の後）の間の不連続」を示し、
「ドキュメンタリーの誤信」（言葉は事物と同定できるという誤つ
た信念）の危うさを表していると論じている。⁽²⁹⁾ 野坂昭雄は「統
辞法が混乱している上に、節や単語を句切る箇所に躊躇ながら読
むことを強いたるこの詩」が「カタカナの硬質な文字の形」に
よつて「被爆後の広島の滑らかさを失つた光景を視覚的に映し出
し、（文字・言葉の形態が図像を作り出すある種のカリグラム）
となつて「夏の花」という小説の記述に対して批評的、メタ的
に作用して「視点人物が单一のパノラマ的視点によつてもはや
風景を統合できないことを示してゐる」と論じている。⁽³⁰⁾

構成

本多秋五が「夏の花」の「主人公が亡妻の墓に花をそな
へるところからはじまり、妻の死骸をさがしまはる男の話で閉ぢ
られてゐるのは、偶然かも知れないが、意味深長だと思ふ」と語
つたことに現れてゐる通り⁽³¹⁾、「夏の花」の冒頭部で「私」が亡
き妻の墓参をすることと、結末部でNが行方不明の妻を探しまわ
ることが呼応した構成になつてゐるという見方は早くからある。
仲程昌徳は「作品の構成をともすればこわしてしまいかねない危
険を冒してまで、あえて」Nのことを書いたのは「広島の惨劇」
を描くのに「一人の視点によつて書かれたことのある種の狭さを

気にして、〈広範囲にまたがった罹災の混乱をよく伝えようとした〉からであると論じ⁽³²⁾、さらに冒頭部では〈死んでいた妻や父や母に対する哀惜の念〉をその墓へ参つて〈花や水や線香〉を献^{ささ}げるという形で〈美しい「死」のかたち〉を描く一方、結末部では〈個性〉を奪われた〈原爆による無数の悲惨な死〉を〈哀惜よりも憤怒〉の念とともに描くという〈強烈な対照〉によつて、〈原爆による死の無惨さを刻み込んで〉いるのだと論じている⁽³³⁾。しかし、中村三春はNの挿話について〈広範囲にまたがった罹災の混乱をよく伝えようとした〉とする仲程昌徳に反論して、〈文学的出発期にダダの洗礼を受けた〉原民喜が〈反—物語〉を〈志向〉して〈結末で物語の焦点〉を〈それまでの一人称主体から「N」に〉移すことによつて〈伝達という形式の完成〉を避けたのだと論じている⁽³⁴⁾。

このように短篇「夏の花」については、死者（妻と父母、さらに被爆死者）への献花から原爆そのものまでという「題名」の多義性、出来事の忠実な記録からそれに留まらない小説までという「記録／虚構」の重層性、非日常的な言葉の使用による被爆後の世界の表象からその表象不可能性までという「カタカナ詩」の機能の多様性、被害の大きさを示すための視点の変化から物語の破壊までという「構成」の働きの複数性などが指摘してきた。「夏の花」は時の流れとともに一義的な記録から多義的な小説へとその解釈の幅を広げながら読み継がれてきたと言える。この理由の一つは全集の刊行などにともなう研究資料の充実や批評理論の先鋭化といった研究の材料と方法の変化によるものであり、もう一つは原爆投下という出来事とそれを描こうとした「夏の花」という作品

がもともと持つていた多面性によるものであると考えられる。

三 「夏の花」三部作はどのように読まれてきたか？

江種満子は「夏の花」の冒頭部に〈原子爆弾に襲はれたのは、その翌々日のことであつた〉と語られ、「壊滅の序曲」の末尾に〈原子爆弾がこの街を訪れるまでには、まだ四十時間あまりあつた〉と語られていることに注目して〈原爆三部作のうちで最後に書かれた「壊滅の序曲」の最終の日時は、「夏の花」の墓参の日時に重なり、原爆をめぐる原の時間はそこで事実上円環を作り出しているのだと指摘している⁽³⁵⁾。ちなみに、このような円環的な時間構造は井伏鱒二「黒い雨」（新潮社、一九六六・一〇）についても登場人物たち（そして読者）を繰り返し被爆時に連れ戻す機能を持つものとして指摘されている⁽³⁶⁾。

しかし、この三部作の配列は一九六〇年代半ばから一九七〇年代前半にかけて刊行された書籍において崩される。川口隆行は一九六五年に刊行された芳賀書店版『原民喜全集』（普及版）一九六六年二月）になると、〈壊滅の序曲〉（被爆三日前まで）→〈夏の花〉（被爆直後）→〈廃墟から〉（被爆数日後）という歴史的時間に沿つた配列を採用し、（三部作の配列は以後、七〇年代前半にかけて、晶文社版『夏の花』（一九七〇年七月）、講談社文庫版『夏の花・鎮魂歌』（一九七三年五月）、新潮文庫版『夏の花・心願の国』（一九七三年七月）とそれにすべて倣う）ようになり、さらに（七〇年代後半に刊行された青土社版『定本原民喜全集』（一九七八年八月）一九七九年三月）に至ると、配列は再び初出发表順に

爆滅の序曲

夏の花

小さな村

水花

魔境から

火の舞

飢ゑ

火の罪

火の春

火の供

永遠のみどり

〔原爆以後〕

芳賀書店版全集・第二巻目次(部分)

復されることとなり、以後、
集英社文庫版(一九九三年五月)
月)を除き、岩波文庫『小
説集夏の花』(一九八八年六
月)、土曜美術社日本現代
詩文庫版『原民喜詩集』(一
九九四年一二月)、講談社文
芸文庫版『原民喜戦後全小
説上』(一九九五年七月)など
主流は初出発順を採用

していることに注目している⁽³⁷⁾。この現象について川口は「作品としての一貫性を歴史的時間軸に頼ることは、作品内の出来事を、原爆投下を中心とする因果律に配して、年代記的な意識によつて読み進めるよう読者を促すのであり、『読者は、困窮した戦争中から原爆投下を経て廃墟の広島を辿りながら、その直線的単線的な時間の延長線上にみずから的位置を発見するわけで、作品内世界に描かれた空間を読者自身の生きる歴史的空间として無媒介に接続する誘惑に駆られる』のだと論じている。

このことには、ある歴史的事実をみずからものと意識し、それを他者と共有していると了解する感覚が「共同体成立の必須条件」として機能していると考えているからである。長田弘は芳賀書房版『原民喜全集』の解説で「夏の花」の「私が肩を貸した『一人の兵士』が『死んだ方がましさ』と『吐き棄てるやうに呟いた』のを聞いて『暗然として肯き』、『愚劣なものに対する、やりきれない憤りが、この時我々を無言で結びつけて

ゐるやうであつた』と語つてることについて「夏の花」で「ただ一ヵ所『我々』という言葉がつかわれてゐる部分」として重要な視し、「この言葉によつて内部からわたしたちの共同体の原イメージを掲きたてられる」と述べている⁽³⁸⁾。「夏の花」の完全版が発表される(一九五三年三月)まで、削除されていたこの「愚劣なもの」について、竹長吉正は「具体的に何を意味するのか」は「漠然として理解しがたい」が、「読者の頭によつて自由に想像される余地を残しているという点で、まさに柔軟性のある言葉使いである」とし⁽³⁹⁾、萬屋秀雄は「直接的にはこのような原爆を投下したもの(アメリカ)に対しても、更に、このような戦争をひきおこしたもの(日本)に対してでもあり、戦争そのものが存在することでもあり、戦争をひきおこす人間そのものに対する憤りにも解釈され得るのである」とするなど⁽⁴⁰⁾、幅広い解釈がなされるが、長田は「愚劣なもの」という対象ではなく、それに「憤り」を感じる「我々」という主体に着目して、そこに「共同体の原イメージ」を見たのである。ここに川口は「共同体誕生の瞬間」を読み取り、「長田のいう『わたしたちの共同体の原イメージ』とは、『愚劣なものに対する、やりきれない憤り』を出発点とし再生を誓つた、戦後日本社会にほかかるまい」と指摘している。

「夏の花」三部作の配列問題は「夏の花」と「黒い雨」の国語教科書への掲載、大田洋子作品の忘却、長岡弘芳『原爆文学史』(風媒社、一九七三・六)の刊行などと並んで、川口が七〇年代前半に「加害者としての過去を忘却する」あるいはそれを引き受けたとしても「原爆投下時広島には、大日本帝国臣民であつた朝鮮、台灣出身者、強制連行された中国人、南方占領地からの留学

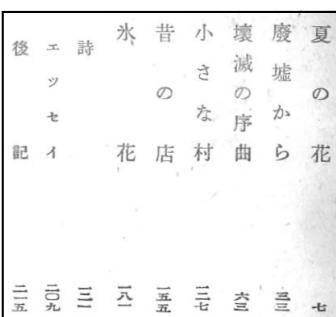
生、さらには原爆投下の当事者とでもいべき連合国軍捕虜などが多数存在した〉にもかかわらず、「ヒロシマ」を「日本人」の体験に切り詰め〉ようとするという「ナショナルな欲望」にもとづいて「原爆文学」が正典化されたと指摘する根拠の一つになっているのである。

四 小説集 夏の花 はどのように読まれてきたか？

エピグラフ

『小説集 夏の花』（能楽書林、一九四九・二）が刊

行されたときに、〈わが愛する者よ請ふ急ぎはしれ／香はしき山々の上にありて獐の／ごとく小鹿のごとくあれ〉というエピグラフが掲げられた。これは『旧約聖書』「雅歌」の結びの言葉（第八章第一四節）を引用したものである。のちに短篇「夏の花」のエピグラフとして掲載しているもの（『友よ・夏の花・原爆詩』金の星社、一九八五・七等）や「夏の花」三部作のエピグラフとして掲載しているもの（『原民喜作品集 第一巻』角川書店、一九五三・三等）もあるが、原民喜の生前に刊行されたもの（『創作代表選集1』大日本雄弁会講談社、一九四八・七等）の中でのエピグラフがあるのは『小説集 夏の花』だけなので、これは短篇「夏の花」や「夏の花」三部作ではなく、『小説集 夏の花』のエピグラフと考えるのが妥当であろう。このエピグラフについて山崎正純は〈作品冒頭に置かれるこの切迫した呼びかけが、一九四五年八月六日の朝、突如「眼の前に暗闇がすべり墮ちた」その瞬間の到来を知る者から發せられていることはたしかであり、この呼びかけも虚しく広島の朝の暮しの頭上高く原爆がさく裂したことは、読者の誰もが知る



明らかに符号しており、そういう描き方のなかに、語り手が、ひいては作者が、原爆と「昔の店」との関係をどう捉えているかがはつきりと現わっているのだし、「昔の店」にある〈長押にある父の肖像を見上げては、これだけの家とあの店を一代で築いた父は何といつてもやはり偉かつたのだなあ——と、おづおづと考へた〉という描写と「夏の花」にある〈長押から墜落した額が殺氣を帯びて小床を塞いでゐる〉という描写に照應関係を見て

〈「長押から墜落した額」が何を意味するのか、「夏の花」だけでは判然としない〉が「昔の店」を合わせて読めば、〈それが父の遺影であり、ぼつくり折れ曲がった庭の楓と共に、〈家〉の崩壊を象徴していること〉が分かるのだと論じている。さらに野中は「昔の店」の結末部に描かれる〈君は一体誰のお蔭で今日まで生きて来たのかね〉〈誰つて、僕を養つてくれたのは無論親父さ〉〈うん、親父だらう、その親父の商売は、あれは君が一番きらひな軍人を相手の商売ちやないかね〉というやりとりにも注目することによって『小説集 夏の花』が〈原子爆弾を被害者の一人と立場で捉えるだけにとどまらず、原爆を落としたのは実は自分ではないのか〉という痛切な認識に裏打ちされた書物だという受容のしかたが可能となる〉のだと論じている。

川津誠は〈私を救つたのは、父の建てた頑丈な家〉であり、〈広島を逃げだせたのは、長兄の手配した馬車のおかげであつた〉と短篇「夏の花」に描かれる家の問題を指摘していたが⁽⁴⁵⁾、野中は『小説集 夏の花』から浮かびあがる家の問題を指摘しているのである。大久保房男は原民喜が自分の家が〈陸軍御用達だつたことに、絶えずコンプレックスを持って〉おり、〈ぼくの家は、戦

争成金で、そして工員を搾取してたんだ〉と語つていたと証言している⁽⁴⁶⁾。こうした戦争と階級に対する原の当事者意識を見ても、『小説集 夏の花』に被害と加害の重層的な関係を読み取る野中論には説得力がある。

五 残された課題

以上、短篇、三部作、小説集という大きく三つの視点から原民喜『夏の花』がどのように読まれてきたかを見てきた。もちろん『夏の花』について語られたことのすべてを整理できたわけではないが、取り上げられなかつたことについては別稿に委ねることにして、最後に今回の整理から見えてきた課題を挙げて本稿を終えたい。

第一にカタカナ詩について。短篇「夏の花」に挿入されるカタカナ詩とその前後の散文の差異については議論が積み重ねられているが、詩そのものの分析や『小説集 夏の花』に収められたもう一つの詩「燃工ガラ」との関係については検討の余地があるようと思われる。あるいは詩そのものの分析は「夏の花」論以外のところでなされているのかもしれないが、それと「夏の花」をより緊密に関係づけることができればまた新しいことが見えてくるのではないかだろうか。

第二に引用について。大田洋子「屍の街」や井伏鱒二「黒い雨」や林京子「祭りの場」が新聞や報告書や手記など他人が書いた文章を多く引用しながら書かれているのに対しても原民喜「夏の花」にはそのような引用がほとんど見られない。原爆投下という出来

事の大きさや特異性を示すために引用によつて視点を複数化することとはいわゆる「原爆文学」において多くなされる手法であるが、「夏の花」ではそのような手法が取られていないのである。これは藤島宇内が原民喜の手法を「日本の一八九〇年代以降に発達した私詩、または私小説の方法」であると指摘した通り⁽⁴⁷⁾、原の創作スタイルによるものと考えれるが、引用を少なくすることによってどのような可能性が開かれ、閉ざされているのかについて考
える必要があるようと思われる。

第三に加害性について。『小説集 夏の花』として見れば、いわゆる戦争加害者としての原民喜の自己認識を読み取ることがで
きると指摘されているが、三部作の一つである「壊滅の序曲」にも「森製作所の縫工場」に（六十人ばかりの女子学徒）が来ていたことなどが描かれている。三部作や短篇「夏の花」という枠組みの中でも「私」（たち）の加害性を読み取ることはできるので
はないだろうか。「私」の家業の描かれ方や「私」が誰にどのよ
うな連帯感を抱いているのかといったことに注目することによつて、短篇「夏の花」や「夏の花」三部作の被害と加害の重層性を
より明確に浮かび上がらせることができるかもしれない。

第四に植民地主義と性役割の問題について。第三に挙げた課題にも深く関わるが、『小説集 夏の花』に収められた「小さな村」には「軍刀」を持つて現れた〈将校〉から逃げ去る〈朝鮮人〉のことが描かれている。また三部作の一つである「廃墟から」には〈行方不明の妻を探すために数百人の女の死体を抱き起して首
検してみたところ、どの女も一人として腕時計をしてゐなかつた
とあり、これは「原爆被災時のノート」の「今本ハ女房ノ死体ヲ

探スノニ 何百人ノ女ノ打仗セニナレルヲ起シテ首実検ヲシタガ
腕時計ヲシテキル女ハ一人モナカツタト云フ」という結びがもと
になつてゐるようである。たとえばこういつた記述に注目してボ
ストコロニアル的、あるいはジエンダー論的視点から検討すれば
『小説集 夏の花』の新しい側面を浮かびあがらせることができ
るかもしれない。

最後に教材論について。「夏の花」は一九七五年度にはじめて三
省堂の「新版 現代国語3」に採録されて以来、国語教科書に掲
載されつづけている「原爆文学」の教材でもある。二〇二三年度
からも高等学校で使用される国語教科書、三省堂の「精選 文学
国語」と第一学習社の「高等学校 文学国語」「高等学校 標準文
学国語」に掲載される予定である。一方、「黒い雨」は一九七三年
度にはじめて筑摩書房の「現代国語1」と東京書籍の「現代国語
1」に採録されてから教科書に掲載されつづけていたが、二〇二
一年度からは掲載する教科書がなくなつてゐる。このことをどのように考
えればよいのか、検討する必要があるようと思われる。

注

1 本多秋五「壺」（『近代文学』一九四九・七）。

2 原民喜「永井善次郎宛書簡」（一九四五・一二・二八）。この書簡には「別便で別の原稿を送つておきますから読んでみて下さい。この「雜音帳」は原稿が間にあはなかつた時の用意にと思つて清書しておいたものです」とも記されている。「雜音帳」は「近代文学」第三号（一九四六・四）に掲載された。

3 佐々木基一・大久保房男・遠藤周作「鼎談原民喜」（『定本原民喜』

全集別巻「青土社、一九七九・三」。

4 境谷雄高「近代文学」創刊まで」(「近代文学」一九五五・一)。

5 本多秋五「壺」(前掲)。

6 原民喜「略歴と感想」(第一回水上瀧太郎賞)」「三田文学」一九四九・一)。

7 佐藤春夫「原民喜君を推す」(第一回水上瀧太郎賞)」「三田文学」一九四九・一)。

8 佐々木基一「解説」(『夏の花』岩波文庫、一九八八・六)にも記

されている通り、「原民喜作品集 第一巻」(角川書店、一九五三・三)においてはじめて復元された主な本文は次の三個所である。(ど

のやうな人々であるか……。男であるのか、女であるのか、殆ど区

別もつかない程、顔がくちやくちやに腫れ上つて、随つて眼は糸の

やうに細まり、唇は思ひきり爛れ、それに、痛痛しい肢体を露出させ、虫の息で彼等は横はつてゐるのであつた。」(私も暗然として肯

き、言葉は出なかつた。愚劣なものに対する、やりきれない憤りが、

この時我を無言で結びつけてゐるやうであつた。)(これは精密巧

緻な方法で実現された新地獄に違ひなく、ここではすべて人間的な

ものは抹殺され、たとへば屍体の表情にしたところで、何か模型的な

機械的なものに置換へられてゐるのであつた。)

9 原民喜「後記」(『夏の花』能楽書林、一九四九・二)。原は「小

さな村」「昔の店」「氷花」もそれぞれ三部作とつながりのあるもの

である」とも語つてゐる。

10 原民喜「永井善次郎宛書簡」(一九四六・二・一五)。

11 仲程昌徳「夏の花」の方法—原民喜ノート(Ⅶ)」「琉球大学法

12 竹原陽子「原民喜「夏の花」の発表」(「三田文学」二〇二一・八)。

13 山本健吉「詩人の死の意味するもの—原民喜の死について—」(「三田文学」一九五一・七)。

14 萬屋秀雄「文学教材の虚構性・象徴性の指導について—「夏の花」(原民喜)の場合—」(鳥取大学教育学部研究報告(教育科学)一九八一・一〇)。

15 原民喜「死と愛と孤独」(群像)一九四九・四)。

16 原民喜「長崎の鐘」(「近代文学」一九四九・一〇)。

17 佐々木基一「解説」(『夏の花』角川文庫、一九五四・八)。

18 本多秋五「壺」(前掲)。

19 山本健吉「解説」(『日本文学全集72 名作集(四) 昭和篇下』新潮社、一九六五・一)。

20 開高健「紙の中の戦争—原民喜『夏の花』の場合—」(「文学界」一九七〇・一)。

21 脇康治「夏の花」教材研究ノート—虚構性を中心にして」(「国語教育研究」一九八〇・一)。

22 江種満子「夏の花」(原民喜)」「国文学 解釈と鑑賞」一九八五・八)。

23 鶩只雄「『夏の花』の内と外」(『新しい作品論』へ、『新しい教材論』へ 4 右文書院、一九九九・六)。

24 竹西寛子「広島が言わせる言葉」(『夏の花』晶文社、一九七〇・七)。

25 右遠俊郎「慘劇の直視と嘆き—原民喜『夏の花』について—」(「民
主文学」一九七一・八)。

26 江種満子「夏の花」(原民喜)」「前掲)。

- 菅本康之「夏の花」論（明治大学大学院 文学研究論集）一九九五・八）。
- 田崎弘章「爆弾は実在する—ティム・オブライエン作・村上春樹訳『二ユートクリア・エイジ』を読む」（原爆文学研究）二〇〇五年八）。
- ジョン・W・トリート「原民喜とドキュメンタリーの誤信」（グラウンド・ゼロを書く 日本文学と原爆）水島裕雅他訳、法政大学出版局、二〇一〇・七）。
- 野坂昭雄「原爆写真というメディアと〈詩〉」（原爆文学研究）二〇一六年八）。
- 本多秋五「壺」（前掲）。
- 仲程昌徳「夏の花」について—原民喜ノート（IV）（琉球大学法文学部紀要 国文学論集）一九七九・一）。
- 仲程昌徳「夏の花」の方法—原民喜ノート（VII）（前掲）。
- 中村三春「レトリックは伝達するか—原民喜『鎮魂歌』のスタイル」（山形大学紀要（人文科学）一九九二・一）。
- 江種満子「夏の花」（原民喜）（前掲）。
- 詳細は松本鶴雄「黒い雨」の時間論（社会文学）一九九〇・七）および拙稿「黒い雨」はどのように読まられてきたか?」（原爆文学研究）二〇一四年二月）をご参照いただきたい。
- 川口隆行「原爆文学」という問題領域—「夏の花」「黒い雨」の正典化、あるいは『原爆文学史』（Problématique 文学／教育）二〇〇一年七月）。
- 長田弘「解説・I」（原民喜全集 第一巻）芳賀書房、一九六五年九）。
- 菅本康之「夏の花」論（明治大学大学院 文学研究論集）一九九五年八）。
- 山崎正純「原民喜「夏の花」論—灰白色の文学—」（言語文化研究（日本語日本文学編）二〇一八年三月）。
- 佐々木基一「解説」（夏の花）岩波文庫、前掲）によれば、小説集 夏の花 の〈帯〉には、「世紀の閃光はあざやかだつた／恐怖の体験はみごとに描かれた／戦慄の廃墟からみずみずしい文学の花は咲いた／明日の人類におくる記念の作品」という宣伝文句があるが、わたしの記憶にまちがいがなければ、これは原民喜が自分で書いた広告文であったとあり、この帯の広告文も含めて原民喜の作品と見ることができる。
- 大高知児「水花」 疲弊の中の幽き希望と『小説集 夏の花』の題辭（紙に刻まれた（広島） 原民喜『小説集 夏の花』を読む）三省堂、二〇二〇・八）。
- 野中潤「小説集のなかの小説—原民喜「夏の花論」のための覚書—」（学芸国語国文学）一九九一年三月）。
- 川津誠「三部作『夏の花』論（国語と国文学）一九八八年七月）。
- 佐々木基一・大久保房男・遠藤周作「鼎談原民喜」（前掲）。
- 藤島宇内「解説」（夏の花・鎮魂歌）講談社文庫、一九七三年五月）。ただし藤島は「表現されている対象としての原民喜という人間が、ふつう世間一般で価値があると思われているものに価値をみとめず、これが「生活」であると思われているような生活を持つていなかつ

たことから「表現された作品からは」それが「私詩、または私説」であるような「印象をうけない」とも論じている。

付記

本稿は第六七回原爆文学研究会（二〇二二・一二・四、オンライン開催）での口頭発表をもとに、新たに論としてまとめたものである。質疑を通じて示唆を与えてくださった方々に御礼を申し上げる。

『夏の花』研究文献一覧

- 【一九四〇年代】
1 丸岡明 「編輯後記」（『三田文学』一九四七・六）
／2 佐藤春夫 「原民喜君を推す（第一回水上灑太郎賞）」（『三田文学』一九四九・一）／3 平田次三郎 「人類の召使として 原民喜『夏の花』」（『人間』一九五一・五）
大田洋子 「屍の街」 小倉豊文 「絶後の記録」を読んで」（『書評』一九四九・五）／4 本多秋五 「壘」（『近代文学』一九四九・七）
年代 5 佐々木基一 「原爆と作家の自殺」（『人間』一九五一・五）
6 丸岡明 「原爆と原民喜の死」（『文藝春秋』一九五一・五）／7 本多秋五 「火焔の子」（『三田文学』一九五一・五）／8 山本健吉 「詩人の死の意味するもの—原民喜の死について—」（『三田文学』一九五一・七）／9 藤島宇内 「原民喜おぼえ書き」（『三田文学』一九五一・七）／10 大田洋子 「原民喜の死について」（『近代文学』一九五一・七）／11 佐々木基一 「解説」（『原民喜作品集 第一卷』角川書店、一九五三・三）／12 寺田透 「原民喜のこと」（『近代文学』一九五三・六）／13 佐々木基一 「解説」（『夏の花』角川文庫、一九五四・八）／14 平野謙 「解説」（『昭和文学全集53』角川書店、一九五五・二）／15 白井吉見 「解説」（『戦後十年名作選集 第七集』光文社、一九五五・七）／16 小田切
- 【一九五〇年代】
1 丸岡明 「編輯後記」（『三田文学』一九四五・八）／17 増谷雄高 「近代文学」創刊まで（『近代文学』一九五五・一）／18 本多秋五 「解説」（『少年少女のための日本文学宝玉集 下』宝文館、一九五六・八）／19 白井吉見 「解説」（『現代日本文学全集』88 筑摩書房、一九五八・八）
田善衛 「原民喜の文学と現代」（『朝日新聞』一九六三・八・二）／20 堀遠藤周作 「原民喜」（『新潮』一九六四・七）／22 無署名 「原民喜『夏の花』」（『国文学』解説と鑑賞、一九六四・九）／23 山本健吉 「解説」（『日本文学全集』72 名作集（四）昭和篇下』新潮社、一九六五・二）
／24 阿川弘之 「解説」（『昭和戦争文学全集』13 原子爆弾投下さる』集英社、一九六五・八）／25 いいだ・もも 「解説」（『原民喜全集 第二卷』芳賀書房、一九六五・八）／26 浅見淵 「解説」（『戦争の文学』の戦争悪と原罪」（『戦争の文学』東都書房、一九六五・八）／27 長田弘「解説・1」（『原民喜全集 第一卷』芳賀書房、一九六五・九）／28 『近代文学選』（秀英出版、一九六六・三）／29 平野謙 「作品解説」（『日本現代文学全集』95 講談社、一九六六・七）／30 太田正夫 「十人十色を生かす文学教育—民喜『夏の花』ドーデー「スガンさんのやぎ」泰淳「ひかりごけ」の実践—」（『日本文学』一九六七・三）／31 竹内泰宏「解説」（『全集・現代文学の発見 第十卷』証言としての文学』学芸書林、一九六八・六）
【一九七〇年代】
32 開高健 「紙の中の戦争—原民喜『夏の花』の場合—」（『文学界』一九七〇・一）／33 平野謙 「作家と作品」名作集（三）昭和編」（『日本文学全集』88 名作集（三）集英社、一九七〇・一）／34 佐々木基一 「原民喜と大田洋子さんのこと」（『作品集』八月六日）を描く』文化評論出版、一九七〇・六）／35 岩崎清一郎 「ヒロシマ・その虚像」（『作品集』八月六日）を描く』文化評論出版、

秀雄「この本を編むに当つて」（『原子力と文学』大日本雄弁会講談社、一九五五・八）／17 増谷雄高 「近代文学」創刊まで（『近代文学』一九五五・一）／18 本多秋五 「解説」（『少年少女のための日本文学宝玉集 下』宝文館、一九五六・八）／19 白井吉見 「解説」（『現代日本文学全集』88 筑摩書房、一九五八・八）
堀遠藤周作 「原民喜」（『新潮』一九六四・七）／22 無署名 「原民喜『夏の花』」（『国文学』解説と鑑賞、一九六四・九）／23 山本健吉 「解説」（『日本文学全集』72 名作集（四）昭和篇下』新潮社、一九六五・二）
／24 阿川弘之 「解説」（『昭和戦争文学全集』13 原子爆弾投下さる』集英社、一九六五・八）／25 いいだ・もも 「解説」（『原民喜全集 第二卷』芳賀書房、一九六五・八）／26 浅見淵 「解説」（『戦争の文学』の戦争悪と原罪」（『戦争の文学』東都書房、一九六五・八）／27 長田弘「解説・1」（『原民喜全集 第一卷』芳賀書房、一九六五・九）／28 『近代文学選』（秀英出版、一九六六・三）／29 平野謙 「作品解説」（『日本現代文学全集』95 講談社、一九六六・七）／30 太田正夫 「十人十色を生かす文学教育—民喜『夏の花』ドーデー「スガンさんのやぎ」泰淳「ひかりごけ」の実践—」（『日本文学』一九六七・三）／31 竹内泰宏「解説」（『全集・現代文学の発見 第十卷』証言としての文学』学芸書林、一九六八・六）
【一九七〇年代】
32 開高健 「紙の中の戦争—原民喜『夏の花』の場合—」（『文学界』一九七〇・一）／33 平野謙 「作家と作品」名作集（三）昭和編」（『日本文学全集』88 名作集（三）集英社、一九七〇・一）／34 佐々木基一 「原民喜と大田洋子さんのこと」（『作品集』八月六日）を描く』文化評論出版、一九七〇・六）／35 岩崎清一郎 「ヒロシマ・その虚像」（『作品集』八月六日）を描く』文化評論出版、

- 一九七〇・六) / 36 松元寛「解説」『作品集(八月六日)を描く』文化評論出版、一九七〇・六) / 37 竹西寛子「解説」廣島が言わせる言葉』(『夏の花』晶文社、一九七〇・七) / 38 秋山駿「解説」『日本の文學』80(名作集四)中央公論社、一九七〇・一〇) / 39 右遠俊郎「慘劇の直視と嘆き—原民喜『夏の花』について」(『民主文學』一九七一・八) / 40 橋川文三「解説」『戦争文學全集 第三卷』毎日新聞社、一九七一・二) / 41 藤島宇内「解説」(『夏の花・鎮魂歌』講談社文庫、一九七三・五) / 42 長岡弘芳『原爆文學史』(風媒社、一九七三・六) / 43 大江健三郎「解説—原民喜と若い人々との橋のために」(『夏の花・心願の國』新潮文庫、一九七三・七) / 44 竹長吉正「原民喜『夏の花』の教材化研究」(『日本文學』一九七三・九) / 45 岩崎清一郎『広島の文芸 小説・評論』(広島文化出版、一九七三・一〇) / 46 松浦総三『増補決定版 占領下の言論弾圧』(現代ジャーナリズム出版会、一九七四・一) / 47 佐々木充『夏の花』(『国文学 解説と鑑賞』一九七四・七) / 48 中村完『夏の花』と「黒い雨」(『日本文學』一九七五・一〇) / 49 石垣義昭「原民喜『夏の花』」(『日本文學』一九七六・二) / 50 森山博生「夏の花」についての一考察」(『湘南文學』一九七六・三) / 51 竹長吉正「実践報告」『夏の花』(原民喜 を読む—授業実践の一斑』(『国語通信』一九七七・六) / 52 小海永二「原民喜—詩人の死」(国文社、一九七八・三) / 53 桑名靖治「教材としての『夏の花』—教材選択の問題点」(『国語展望』一九七八・一) / 54 藤島宇内「解説—原民喜の死と作品」(『定本原民喜全集III』青土社、一九七八・一) / 55 仲程昌徳「夏の花」について—原民喜ノート(IV)』(『琉球大學法文學部紀要』一九七九・一) / 56 佐々木基一・大久保房男・遠藤周作「鼎談 原民喜」(『定本原民喜全集 別巻』青土社、一九八五・七) / 57 日野裕子「夏の花」小論(『愛文』一九七九・七) / 58 中島健蔵『回想の戰後文學』(平凡社、一九七一・一二) **一九八〇年代** / 59 川西政明『二つの運命—原民喜論』(講談社、一九八〇・七) / 60 臨康治「夏の花」教材研究ノート—虚構性を中心にして』(『国語教育研究』一九八〇・一) / 61 萬屋秀雄「文學教材の虛構性・象徴性の指導について—『夏の花』(原民喜)の場合—」(『鳥取大學教育學部研究報告 教育科學』一九八一・一〇) / 62 仲程昌徳「夏の花」の方法—原民喜ノート(VII)』(『琉球大學法文學部紀要 国文學論集』一九八二・一) / 63 宮里政充「原民喜『夏の花』をどう読むか」(『国語展望』一九八二・六) / 64 長岡弘芳・大江健三郎「人間の条件の根底にあるもの」(『何とも知れない未來』集英社、一九八三・七) / 65 黒古一夫「原爆」とば』(『三一書房、一九八三・七) / 66 仲程昌徳『原民喜ノート』(勁草書房、一九八三・八) / 67 佐々木基一「解説 原民喜の三十三回忌に臨んで」(『日本の原爆文學I 原民喜』ほるぶ出版、一九八三・九) / 68 萬屋秀雄「虚構としての『夏の花』(原民喜)を読む」(『月刊国語教育研究』一九八四・四) / 69 長岡弘芳『原爆文學の系譜』(『反核—文學者は訴える』ほるぶ出版、一九八四・四) / 70 森英一「夏の花」雜考(二)だま』(一九八四・四) / 71 高木展郎「夏の花」(原民喜)一日常性的破壊』(講座「現代の文學教育 第4卷」新光閣書店、一九八四・五) / 72 甲斐睦朗「夏の花(抄)」の心の揺れ動き(『実踐國語研究』一九八五・三) / 73 新井泰春「原民喜『夏の花』で何をめざすか」(『月刊国語教育』一九八五・六) / 74 北村進「夏の花」の學習案(『国語展望』一九八五・六) / 75 佐々木基一「生の美しさと尊さへの憧憬」(『日本の文學』40 友よ・夏の花・原爆詩』金の星社、一九八五・七) / 76 まさわあきら「よむことからはじまるもの」

- 『日本の文学』40 友よ・夏の花・原爆詩 金の星社、一九八五・七) / 77
 長岡弘芳「原爆文学の輪郭」(『国文学 解釈と鑑賞』一九八五・八) / 78
 江種満子「夏の花」(原民喜) (『国文学 解釈と鑑賞』一九八五・八)
 79 佐々木計江「心優しい人間でありたい」(『教育愛知』一九八八・二) / 80
 中山栄暁「夏の花」表記に関する一、二」(『解釈』一九八八・二) / 81
 佐々木基一「解説」(『小説集 夏の花』岩波文庫、一九八八・六) / 82
 遠竹敬子「文学作品のことばのすばらしさについて」(『国文学 解釈と鑑賞』一九八八・七) / 83
 黒田徹・宇田川義明「ムード『らしい』『ようだ』は「だろう」と違う—『夏の花』『雪国』を具体例として」(『国文学 解釈と鑑賞』一九八八・七) / 84 川津誠「三部作『夏の花』論」(『国語と国文学』一九八八・七) / 85 安藤宏「夏の花」
 『原民喜』(『国文学 解釈と鑑賞』一九八九・六) / 86 土井大助「原民喜と夏の花」(『前衛』一九八九・八) 【一九九〇年代】 87 斎藤庸一「広島の夏の花」(原民喜) (『季刊銀花』一九九〇・三) / 88 牛山恵「作品の力—『夏の花』の実践から」(『日本文学』一九九一・三) / 89 中村三春「レトリックは伝達するか—原民喜『鎮魂歌』のスタイル」(『山形大学紀要(人文科学)』一九九二・一) / 90 野中潤「小説集のなかの小説—原民喜『夏の花』論のための覚書」(『学芸 国語国文学』一九九二・三) / 91 井上昌典「原民喜『夏の花』教材論—語りの構造分析と教材研究史の検討」(『奈良教育大学国文 研究と教育』一九九二・五) / 92 野中潤「教科書のなかの文学—原民喜『夏の花』を読む」(『文学と教育』一九九二・六) / 93 藤井淑穎「解説—小説化への過程」、リービ英雄「鑑賞—『原爆』が『文学』になつたとき」(『夏の花』集英社文庫、一九九三・五) / 94 黒古一夫「原爆文学論—核時代と創造力」(彩流社、一九九三・七) / 95 森田博信「原民喜断章・その『愛』と『死』」
 と「実存」(『日本文学論叢』一九九四・四) / 96 長崎宗平「原民喜『夏の花』の構想」(『表現研究』一九九四・九) / 97 田中寛「原民喜の『夏の花』を読んで—留学生の読後感想から」(『講座日本語教育』一九九五・三) / 98 中西敏一「惨劇の大きさと非人間性の実証—原民喜『夏の花』」(『民主文学』一九九五・六) / 99 関川夏央「網膜に焼き付いた風景」(『原民喜戦後全小説』講談社文芸文庫、一九九五・八) / 100 菅本康之「夏の花」論(『明治大学大学院 文学研究論集』一九九五・八) / 101 鈴木康之「原民喜『夏の花』について」(『研究会報告(日本語文法研究会)』一九九八・三) / 102 川津誠「『原民喜』編 解説」(『作家の自伝』71 原民喜) 日本書センター、一九九八・四) / 103 川村小百合「原民喜論」(『藤女子大学 国文学雑誌』一九九八・一二) / 104 鷺只雄「『夏の花』の内と外」(『新しい作品論』)、『新しい作品論』へ、『新しい教材論』へ 4 右文書院、一九九九・六) 【二〇〇〇年代】 106 川口隆行「原爆文学」という問題領域—『夏の花』『黒い雨』の正典化、あるいは『原爆文学史』(『Problématique (文学/教育)』二〇〇一・七) / 107 船越高典「原民喜『夏の花』—最終章に関する一考察」(『国語 教育と研究』二〇〇一・三) / 108 川津誠「GHQのアーティストカード—占領軍検閲の実態」(『国文学 解釈と教材の研究』二〇〇一・七) / 109 澤田章子「原民喜『夏の花』」(『民主文学』二〇〇一・八) / 110 川津誠「原民喜小考—死に向ける視線」(『人』ことば・文学) 鼎書房、二〇〇一・一) / 111 岩崎文人「夏の花」(原民喜) 三部作とその周辺—陸軍用達商一家の興亡と再生」(一) (『国文学攷』二〇〇三・三) / 112 米山リサ『広島 記憶のボリティクス』岩波書店、二〇〇五・七) / 113

- 田崎弘章「爆弾は実在する——ティム・オブライエン作・村上春樹訳『二二』クリア・エイジ」を読む) (『原爆文学研究』二〇〇五・八) / 114 黒古一夫『原爆は文学にどう描かれてきたか』(八朔社、二〇〇五・八) / 115
- ウルシユラ・ステイチエツク「日記文学としての原爆文学の考察——原民喜の場合」(『国際日本文学研究集会会議録』二〇〇八・三) / 116 佐藤忠男『八月六日ヒロシマ 不滅の記録』(『ひろばユニオン』二〇〇九・八)
- 【二〇一〇年代】 117 成田龍一「解説 ヒロシマ・ナガサキの証言と記憶」(『コレクション 戦争と文学』19 ヒロシマ・ナガサキ) 集英社、二〇一一年・六) / 118 高口智史『原民喜「夏の花」論——ジエノサイドの記憶と表象のドラマ』(『社会文学』二〇一一・六) / 119 ジヨン・W・トーリート「原民喜とドキュメンタリーの誤信」(『グラウンド・ゼロを書く 日本文壇』水島裕雅他訳、法政大学出版局、二〇一〇・七) / 120
- 澤田章子「原民喜「夏の花」三部作を読み直す」(『民主文学』二〇一二・八) / 121 川西政明「二つの嘆き」と「無数の嘆き」(『新・日本文壇』史6 文士の戦争、日本とアジア) 岩波書店、二〇一一・八) / 122 紅野謙介「解説」(『日本近代短篇小説選 昭和篇2』岩波文庫、二〇一二・九) / 123 若松英輔「生きる哲学 第三回 祈る——原民喜の心願」(『文學界』二〇一三・九) / 124 松本滋恵「わたしのフィールドワーク 原民喜と峰三吉」(二〇一四・九) / 125 柿木伸之「パット剥ぎトッテシマツタ後の世界——広島を想起する思考」(インパクト出版会、二〇一五・七) / 126 高橋由貴「原民喜における詩と散文——小説『永遠のみどり』へ——」(『原爆文学研究』二〇一五・一二) / 127 山田敏「原民喜「夏の花」——『私』の表現の不全性・不可能性をめぐつて」(『駒場東邦研究紀要』二〇一六・三) / 128 斎藤美奈子「文学的すぎる解説は戦争には負ける」(『図書』二〇一六・六) / 129 野坂昭雄「写真というメディアと『詩』」
- (『原爆文学研究』二〇一六・八) / 130 伊藤詔子「アル・ハイムの領地」と「人生の航路」——ボーとトマス・コール』(『ディズマル・スワンプのアメリカン・ルネサンス ボーとダーカキヤノン』音羽書房鶴見書店、二〇一七年・三) / 131 永江朗「夏の花」(『日本の時代をつくった本』WAVE出版、二〇一七・四) / 132 高原到「『日本近代文学』の敗戦——夏の花」と「黒い雨」のはざまで」(『群像』二〇一八・三) / 133 山崎正純「原民喜「夏の花」論——灰白色の文学」(『言語文化学研究』(日本語日本文学編)二〇一八・三) / 134 梶久美子「原民喜 死と愛と孤独の肖像」(岩波書店、二〇一八・七) / 135 梶久美子「原民喜——詩と愛と孤独」の自画像』(『愛の顛末』文藝春秋、二〇一八・一) / 136 遠田憲成「原民喜「鎮魂歌」再考——『怨想』を中心に」(『原爆文学研究』二〇一九・一二) 【二〇一〇年代】 137 後山剛毅「原民喜作品における原爆の記憶——二つの『死』に注目して」(『Core Ethics』二〇二〇・三) / 138 大高知児『紙に刻まれた『広島』——原民喜『小説集 夏の花』を読む』(三省堂、二〇二〇・八) / 139 村上陽子「原民喜『夏の花』(『戦後文学』の現在形) 平凡社、二〇二〇・一〇) / 140 後山剛毅「原民喜と『新しい人間』論——言語とリズムに注目して」(『原爆文学研究』二〇二〇・一二) / 141 柴田優呼『プロデュースされた『被爆者』たち——表象空間におけるヒロシマ・ナガサキ』(岩波書店、二〇二一年・三) / 142 平原一良「原君は『詩人でたつべき人です』——草野心平は長光太に手紙で伝えた」(『三田文学』二〇二一・八) / 143 竹原陽子「原民喜『夏の花』の発表」(『三田文学』二〇二一・八) / 144 村松眞理「みどりの時間」(『三田文学』二〇二一・八) / 145 横本由貴「原爆作家」原民喜の俳句創作』(『社会文学』二〇二二・八)